晴れルデ

喜ぶ顔が見たい。

これまで手掛けた作品を前に
「思いと共に仕事してるんで」と語る築山万里子さん
＝大阪市中央区のアサヒ精版印刷で

その印刷会社が気になり出して、もう10年ほどになるだろうか。目を引くポスターや「オモロイやん！」と思う印刷物や、こんなもんが作れるのか、というデザイン作品の陰には、必ずといっていいほど「アサヒ精版印刷」の名前があるのだ。そこには一筋縄ではいかないクリエーターやアーティストたちが無理難題を持ち込むのだが、社長は「できないとは言いたくない」とうそぶき、社員には「何もやらんうちから『無理です』言うな！」と発破をかけ、涼しげな顔で次から次へと跳んだことのないハードルに挑み続ける。黒衣に徹するその仕事ぶりに、ちょっとのぞいてみようかな――。

そんな軽い気持ちで、大阪・上町台地の難波宮跡にほど近い法円坂のマンション1階にある会社を訪ねた。印刷会社というと、印刷機がガチャンガチャンと音を立てている工場のイメージだが、ここはデザイン事務所と見まがうようなオフィスだ。それもそのはず、どこを見回しても印刷機はない。1980年代以来、ここは印刷機を持たないで印刷会社をやっている。

じゃあ、どこで印刷してるのか？　という疑問は後回しにして。社長に何の気なしに、知り合いのアートディレクターから聞いた話を伝えた。「仲間内では、アサヒさんにどんだけ無理言ったか、みたいな自慢のし合いがある」って。そしたら社長の築山（つきやま）万里子さんは、「うーん」みたいな顔をしてこう言うのだ。「うちの仕事は無理聞いてナンボ。無理を無理と思ってないので。そら苦労はしてますけど、無理を聞いたって感覚ではないんです」

マリさん（ほぼ同世代なので、こう呼ばせてもらう）に尋ねた。それは意地とか負けず嫌いとかじゃなく？

「そんなんじゃなくて。その人が喜ぶ顔が見たい！」

邪気のない笑顔でこう言われて、私は胸を射抜かれた。シンプルな言葉ほど、人を捉える力がある。心のうちがこぼれた言葉ほど、感情を揺さぶられる。この人のチカラはどこから来る？　人のやらない仕事って、なんなんだ？　そんな興味が次々に湧いてくる。

父親の先代社長から指名され、社長に就いたのは、（歌の文句じゃないけれど）あれは3年前。その就任パーティーで、こう語った。

「まだまだベテランの時代が効いてくると思っています。10人足らずの小さな会社ではありますが、工場や職人の方との深いつながりが宝であり、これからも大切にしていきたいものづくりの原点です」

ベテランの時代、印刷機のない印刷会社、ものづくりの原点、そしてマリさんの名刺にある「プリンティングディレクター」という肩書――。アサヒ精版印刷とマリさんの仕事に分け入り、気になるキーワードを解き明かしてみたい、と思う。

この連載ではマリさんと呼ばせてもらおう

文・松井宏員　写真・川平愛　デザイン・シマダタモツ